



メンバーからの ほつとレター

ぬくもりほつとらいん考

傾聴電話の「受け手」になつてから3年が過ぎた。傾聴という聴き方がどういふものかまだ掴みきれず試行錯誤の中にいる。

私は最初、傾聴は技術だと思つていた。会話の手法を数多く身につけて経験を積むことで確実に上達していくものだと思つていた。

しかし、共感と受容をしなければならぬと知り、出来ない自分分は心の狭い冷たい人間だと思えた。

傾聴を心がけた会話に違和感があり、どうしたらいいのかわからぬ時もあった。先生の自然で自由な聴き方に「一致」とは何かを考へるようになったのはつい最近のことだ。

電話の向うで懸命に生き方を語る人 聴くことを求めて変わってきた私

今度は「一致」ばかりが膨らみ続けた。私が聴く。私の普通で聴く。私を大きく

もしない。小さくもしない。ただ話を聴く時、私の普通のアテンナが受信して、言わずにいられないことを言う。

受容だの共感だの一致だのと紆余曲折しながら、いまだ傾聴が何なのか、自分が何なのかよく分かつていないが、先生の言葉に触れるたびわかつたような気になり勇気が湧く。

一番最近先生の言葉にハッとさせられたのは「掛け手は自分の生き方を語つていく」というひとことだ。

「あーっそうか!!」と私の心は一気に目が覚めた。批判も評価もアドバイスもなく、自分の価値観に合わなくてもただ物語を聴くのだと、以前にも

学んだことだ。そしてこうしめる「あなたはそう思うのです」と。

私は物語ではピンとこなかつたが、生き方には驚きハツとした。

電話の向うに懸命に生き方を語る人がいることに感動した。ひとは自分の生き方を真剣に語りたいたのだ。ちやかされることなく、批判されることなく「私はこうなんだ!」と自分を解放したいのだ。そんな人たちが「ぬくもりほつとらいん」に電話してくるのだ。

「私はこうなんだ!」という人に、「あなたはそうじゃない」と言う必要はない。「私はこう生きています!」という人に「あなたはそう生きていない」という必要はない。あーっそうか……、生き方を語つているんだ。聴くしかできない、をぐつと自分に引き付けたような気がしている。

人形に語つた昔日

私の勤めるデイサービスセンターの利用者さんに95歳の女性がいます。ある日大変な亭主関白だったご主人のエピソードを話された。

「あんまり悔しいからお人形に『ねえ、ねえ、聴いてよ』つて毎日話してたの!」
「そう。私の地方ではね、嫁



入り道具に二人の形を持つていくの。男の子と女の子ね。替えの

着物もあつたのよ。八つ当たりで着物が破れる時のためにね」

後日その方は桐の箱に入つた男女二体の人形を持つてきて見せてくれた。

5、6歳の幼児のような白い頬はふつくと丸みを帯びて、口と目は優しくほえんでいるようだった。この人形が誰にも言えない話を黙つて聴いていたのか。

昔の人も自分を語ることがいかに大切かを知つていたのだ。そして母は娘の嫁入り道具に人形をそつと忍ばせたのだ。

私は傾聴について考えるたび、あの人形を思い出す。ぬくもりほつとらいんはあの人形のようなのだ。

私は自分の勉強のために受け手をやつている。でもそれが結果として、誰かの役に立つているとすれば社会的使命と云うにふさわしい活動かも知れない。実は秘かに誇らしい気持ちがある。

(K・M)